2011 年 4 月 20 日放送

領域別入門漢方医学シリーズ

口腔疾患領域と漢方医学

大阪歯科大学　歯科医学教育開発室　教授　　王　宝禮

(7)歯周病と口臭の漢方治療

本日は、歯周病と口臭の漢方治療についてお話しいたします。

国民の 8 割が罹患していると言われる歯周病の発症には、細菌性因子、環境因子、宿主因子が大きく関与し、その発症に生体防御機構である免疫が深く関与しています。つまり、歯周病は免疫応答の破綻に伴い、病態を形成していくことが示唆されています。

歯周病はバイオフィルム、いわゆる歯垢が原因となる疾患であり、歯周病治療の成功の鍵は、患者さんと共同して行われる歯ブラシ指導や歯石除去などの歯周病の治療であります。

特に慢性歯周病においては歯周基本治療が成功し、漢方薬と併用したとき、歯周病の進行抑制を期待できると考えられます。

歯周病を東洋医学的な概念を加味して分類しますと、免疫低下型と炎症型に分類するこ

とができます。
　免疫低下型は、歯肉（歯ぐき）の炎症傾向が少ないにもかかわらず、わずかな出血や排膿が続いたり、歯肉の退縮、歯の動揺、歯槽骨の吸収が認められるとき、いわゆる生体の防御反応の低下が考えられる場合、このようなタイプです。一例としては、温清飲はこのようなタイプの歯周病に適応と考えられます。
　また、炎症型として、歯肉の発赤、腫脹、疼痛、出血、排膿などの炎症症状が著明に認められる場合、いずれの場合も成人性の歯周炎における症状と似ております。一例として、大柴胡湯や黄連解毒湯、排膿散及湯は、このタイプの歯周病に適応と考えられます。
　一方、急性壊死性潰瘍性歯肉炎という歯周病がありまして、この歯周病に対しては根本原因に対する治療として補中益気湯を投与し、有効な場合があります。

　さて、漢方医学から考えた歯周病とは、病邪とは、生体内外のさまざまな発症因子を示しています。歯周病の発症機構は、歯周組織が歯を維持するのに必要な生体の気・血・津液と、歯周組織を破壊する危険性のあるさまざまな病邪とのバランスで考えることができます。
　同じように歯肉に炎症があっても、その背後にはいろいろなタイプの邪がひかえている。例えば、暴飲暴食からくる胃熱、ストレスなどからくる肝火や心火、脾虚がベースになって生じる内湿等、邪の種類によって当然処方が異なってきます。
　また、虚の状態にもいろいろな種類があり、その性質に応じて、益気するのか、養血するのか、滋陰するのか、治法治則は異なってまいります。その人の証に応じた正気を補うことで、その人の受けやすい邪に対する抵抗力がついてきます。
　このようないわゆる随証治療を行うことによって、その人の受けやすい邪を遠ざけ、同時にその人に必要な正気を補っていくと、その人の抱えている全身的な愁訴が改善していきます。この際、肉体的愁訴だけでなく、精神面での改善も重要であります。気持ちの問題というのは結構大きな要素であり、食事が美味しくなった、眠れるようになった、ということから、体内で生じる熱、火、風が収まり、歯周局所の急性発作の機会も少なくなってきます。
　歯周病は、持続的に進行するのではなく、間歇的にバーストが起こって階段を降りるように進行していきます。急性発作の頻度が少なくなるということは、歯周病の進行に歯止めを大きくかける要素となります。

　これまでの文献から、また私の臨床経験から、歯周病に有効な漢方薬がいくつかあります。まず歯周病を、表とし実の場合、葛根湯。そして裏であり実で、例えば便秘がある場合には桃核承気湯、大柴胡湯、防風通聖散。あるいは実証で便秘がない場合には温清飲、黄連解毒湯、白虎加人参湯、桂枝五物湯。そして裏であり中間証から虚証の場合、食欲不振があるならば補中益気湯、十全大補湯。そして食欲がある場合には甘露飲あるいは八味

地黄丸、十味敗毒湯。このようなものが挙げられます。一方、歯周病で、患部に強い化膿がある場合には排膿散及湯が有効な場合が多いと言われております。

では次に、口臭に有効な漢方薬をお話ししてまいります。

最近では、口臭に対する関心が高まっており、口臭に悩む人が少なくないと思われます。また近年、口臭の予防や除去を目的とした洗口液や、安価な簡易式口臭検知器が一般家庭に普及しています。また、口臭を主訴に耳鼻科や歯科を訪れる人も増加していることから、大学病院では口臭専門外来の開設や、一般開業医でも口臭を専門とする診療科が増えていると言われています。

口臭とは、呼気中に含まれる臭いのことでありますが、その原因の 90%は唾液の分泌の低下、口の中の清掃不良、あるいは歯周病などの口腔内の原因に由来します。そのため、まず口臭がある場合には歯科で齲蝕、歯周病の検査を、あるいは治療をするのが第一条件になります。また、病的口臭ともいえる不快な臭いを伴う呼気中には、食渣や剥離した粘液上皮などによる蛋白質基質が、口腔内の嫌気性菌群によって分解され、アンモニアやインドール、スカドールなどが産生されます。さらに、それらの産生物質は、システインやメチオニンなどの含硫アミノ酸が分解されて生じる揮発性硫化化合物であるメチルメルカプタンや硫化水素などの物質が産生されます。

口臭は疾患でなく、病態であり、症状として口臭が起こり、それを自覚あるいは家族を代表とした他人からの指摘により気付いた場合に、患者さんが来院します。

2000 年に、国際口臭学会によって口臭の分類が認知されました。真性口臭症、仮性口臭症、口臭恐怖症の 3 つに分類されます。

真性口臭症は、生理的口臭と病的口臭に分類されます。生理的口臭は起床時、空腹時、飲食時、緊張時、喫煙時、生理時、更年期、老人期に発生するものであり、一日や一生のライフスタイルに起因します。

一方、病的口臭には、全身由来、あるいは口腔由来のものがあり、最も一般的な口臭がこの分野に含まれます。

また仮性口臭は、本人が口臭を感じ、他人には感じないものであります。口臭恐怖症とは、病的に口臭に対する意識が高く、口臭症のなかでも重症症例に該当します。つまり、社会恐怖症により引き起されるものであります。

口臭を治療とする基本は、口臭を分類し、原因を探求することです。口臭調査票を参考に治療を進めることが基本であります。

これまでの私の経験からは、おもに仮性口臭症が漢方薬が有効であることを経験してまいりました。

では、漢方医学から考えた口臭を考えていきます。

まず、口臭には気の因子と熱の因子が大きく関与します。熱臭として、口臭が強く、口

が苦い・冷たい飲み物を好む・舌や口唇が乾く・歯肉に腫脹や疼痛がある・便秘などの症状を伴うものの多くは、胃中に熱が蓄積しており、口内炎や歯肉炎などの患者にみられます。

次に寒臭として、口臭が弱く、ゲップ・味がしない・暖かい飲み物を好む・軟便あるいは下痢などの症状を伴うものの多くは、寒邪が脾胃に停滞して運化機能が失調したことが原因であり、脾胃虚寒証などの患者にみられます。呼気に腐敗臭があり、唾液が臭く、実熱火毒あるいは肺胃に熱が積もり上部に燻蒸している場合。頑固な口臭の多くは、慢性病で中焦が鬱滞していると言われています。また、歯痛、歯が痛い患者さんにおいて、その伴う口臭は、汚濁が陽明に集まっていると考えられます。虫歯で、口臭が、そういうものが腎水不足と言われております。口臭が軽度で、わずかに生臭い臭いは虚寒と考えられます。また、呼気が酸腐臭のものは、胃に食積がある場合があり、そして、口臭が強く、軟便や下痢を伴うものは、脾虚湿盛であり、口臭があり、ゲップ・悪心・嘔吐を伴うものは、肝胆湿熱であると考えられております。

文献から、いくつかの漢方薬が口臭に有効であるということがわかってまいりました。これらの漢方薬を実証、虚証、そして便秘がある・なし、冷えあるいは軟便、あるいは食欲不振とかで分けた場合、次のように考えております。

まず実証で分けた場合、便秘がある場合、大柴胡湯、三黄瀉心湯、大承気湯。また便秘がない場合には黄連解毒湯、白虎加人参湯。

そして中間証から虚証で冷えがある場合、そして軟便がある場合には人参湯、四君子湯。あるいは軟便がない場合、例えば柴胡桂枝乾姜湯、十全大補湯、半夏厚朴湯、茯苓飲、そして加味逍遙散、香蘇散、大建中湯などがあります。おもに精神面で口臭を訴える場合には加味逍遙散が有効な場合が多々あります。

そして、中間証、虚証で冷えがない場合、食欲不振がある場合には、例えば麦門冬湯、参蘇飲、柴朴湯、茯苓飲、小柴胡湯、黄連湯、半夏瀉心湯、補中益気湯などが考えられます。そして、食欲が不振でない場合には四逆散とか抑肝散。このようなものが口臭に有効な漢方薬だと言われております。